
たすけてっ！

菅汰 あかね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たすけてっ！

【Nコード】

N5543Y

【作者名】

菅汰 あかね

【あらすじ】

「入部決定ね！ あ、あとアンタが部長ね」と、幼馴染の神崎ましろに強制された桐咲悠里。「何でもお助け部」となるとも言えないうさんくさい部活に、理由は不明だが男がたった一人。

その他にもクールな後輩・夜桜梨多よすくらんりたや、いつもダルそうな先輩・華月遥はなつきはるか。肌身離さず刀を持ち歩く侍娘・藤原亜理紗ふじわらのあじさ。その他もろもろ。

しかも全員何か訳ありな様子。

そんな状況で、何でもお助け！ 運動部の手助けや、ボランティア活動。…… e t c をしていくにつれて悠里以外の部員達にある異変が……？

非日常ハードな学園青春ラブコメディ。さあ、今日も元気良く手助け手助け

プロローグ（前書き）

ブログから転載。

プロローグ

俺の平穏な生活はことごとく壊れた。

いや、壊された。たった一人によって。

それは春の入学式も終わり、ピツカピカの1年生達がそろそろこの『私立真上学園』にも慣れてきた初夏。

晴れて俺も2年生という、ちよっと調子に乗り掛ける頃合だ。

可愛い後輩を持つという、それはもう嬉しがる奴もいるだろう。嫌がる奴もいるだろう。

ちなみに俺はどちらにも属さない。故に一人で平和に過ごすのが好きだからな。

だから、前の学校ではずっと帰宅部。面倒事は大の苦手。

助け合いなんてもつてのほか、委員会だつて入った事はない。

この学校でもそうだ。俺は何も入らない、それは歪まないはずだった。

放課後、他の皆が部活なり下校なりして、空いた教室。

俺は授業で疲れたんで、疲労が回復するまで自分の席でじつと座っていた。

「ねえ、アンタ。今のところ何も部活に入っていないのよね？」

そこへ、セミロングの金髪（この学校は頭髪を気にしない）を手で分けつつ、右から突然問いかけてくるこいつは 神崎ましろ。

ソプラノの中でも微妙に低いトーンの声が特徴。

付け足すと、一応俺の幼馴染だ。

「ああ、入ってないけど？」

俺はましろの方へと振り向きながら答える。

その言葉を待っていたとばかりのそいつは、長いまつげの瞼を見開き、海のように鮮やかな青い瞳を陽気に輝かせていた。

まるで、こいつの性格をそのまま映すかのようだ。

俺はその時、後悔する。疲れててもすぐに帰れば良かった。とか、もう少し違う答えを出すべきだったと……。

「じゃあ、この……」

「俺は部活なんかに入る気はない。他を当たってくれ」
言葉を言い切る前より先に断っておいた。

「まだ何も言っていないじゃない」

むすつとした顔で俺を睨む。そんな目をして俺は動じないぞ。

「いや、今の話の流れから大体は推測出来る。どうせ俺を部活に勧誘しようとしたんだろ？」

「そうよ、勧誘よ！ 悪いの？」

「こいつ、開き直りやがった……」

「ああ、悪いね。つたく、いつも面倒事を連れて来や」

「あの時の写真」

俺の言葉を遮った一言。たったその一言で俺の運命は変わった。

最悪の方向へと。

ましろは右手にその物をひらひらと見せびらかす。

（何であんなもんをまだ持ってたやがるんだ、こいつは！？ 確かに

あれはフィルムごと燃やしたはずだ！ ……ちっ、そういうことか）

すっかり忘れていた。こいつは？ そういう事が？ 出来るんだって事を……。

「ふふんっ、私の？ 言葉？ に出来ない事はないわ！」

「相変わらず卑怯だよな、お前」

諦めた俺は肩をすくめながらため息を零す。

「卑怯で結構よ！」

ない胸を張ったところで、別に偉くはないから。

「……そんなんだから、いつまでたっても彼氏が出来ないんだぞ？」

「そ、そんな事アンタには、か、かか、関係ないでしょ！？」

ましろは顔を赤く染めながら、テンパったように両手を左右にぶんぶん振る。

(いや、結構関係あるんだよな、これが)

早く彼氏作って、俺をこの理不尽な仕打ちから守って貰いたいからね。 彼氏さんに。

大人しくしていれば、こいつは幼馴染の俺から見てもとても可愛い。

だから、あとはあの性格をどうにかすれば、どれだけの男が振り向くか……。

「弄られ続けてる幼馴染としては結構重要な事なんだけど」

「ああ、はいはい。もうその話はお終い！ はい、終了！」

それにしても、勧誘するだけならお得意の言葉を使えばいいのに。……ああ、そっか。それはモノにしか出来ないもんな。

「で？ 俺はどうしろと？」

「私の部に入りなさい！」

やっぱり部活関連か。

「……ちなみに何部？」

「『何でもお助け部』よ！」

「あ、すみません。帰ります」

机の横に提げている自分の鞆を取り、俺はドアへと向かう。

「この部はね……って！ ちょっと待ちなさいよ!？」

待てと言われて待つ奴はいない。

(なんだよ『何でもお助け部』って。そんなうさんくさい所なんか入れるか！)

俺はドアを開けようと手を伸ばした。

「？ 施錠？ (ロック)」

ガチャン！

あれ？ 開かない。おかしいな、教室のドアに鍵なんて付いてないはずだぞ？

「……これで逃げられない」

その場が一瞬にして凍るかのような冷たく低い。そんな眩く声が
聞こえたのは俺の後ろからだった。

プロローグ2

俺は恐る恐るゆっくりと、まるで錆び付いたロボットのようになり、ぎぎぎときしみながら振り返る。

そこには、黒い笑みを浮かばせながらこっちへと近づいてくるましろ。

真上学園の独特な女子の通常制服。フリルが付いた、純白のドレス風な制服。

それは、着ている者をとてもお淑やかに魅せるほどに美しい出来。まるでどこかの国のお姫様みたいだ。

ちなみに胸元のリボンの色で学年が分かっている。ましろは赤だ。政府や生徒の親から預かっているお金をどれほど女子生徒服だけに注ぎ込んでいるのやら。……いや、今はそんなの関係ないか。

なにしろ俺の目の前には、黒いオーラと同化しているのか、綺麗な制服は混沌な真つ黒（という風に見える）の『魔女様』がいるんだから。

「昔にも言ったけど、『逃がさない』って言ったよね？ 私の言葉は絶対よ？」

（マズイ、また変なスイッチを押したか!?!）

目の前の少女は一言で表すと恐怖。

特に顔が怖い！ 前言撤回、こいつは全然可愛くない、怖い。

俺はそう断言出来る。

近づくましろの更に深さを増した笑みは、より一層、俺を恐怖へと突き落とす。

だ、誰か助けてっ！

「入部希望者を連れて来たわよー」
ズルズルズル。

痛い痛い痛い。擦れてる、地面に全身が擦れてる！

(ちくしょう、俺の平穏な学園生活がああ)

俺はあの後強制的にましろに捕まり、手足を縄で拘束され、
部室と思われる場所まで連れてこられた。

地面に引きずりながら！ ちなみに今もお継続中。

「なあ、摩擦熱でもものすごく痛いんだけど。そろそろ離してくれな
いか？ ……逃げたりしねえからさ」

ヒュツ、ポトンツ。

だからといって、一回上に投げて落とすか！？ 普通。何も受け
る耐性付ける前に地面へと激突したために俺の全身へのダメージ大
だぞ？

「いってえー。お前、本当何もかも突然だよな」

「うるっさいわねー」

あ、今のはさすがに俺も力チンと来たな。ゴングの音みたいに力
チンと。

(……いや、駄目だ。今こんなところで？ 熱く？ なるな。俺！)

とりあえず平常心を保った俺は一度立ち上がったから深呼吸して、
ましろと対面する。

「人を物みたい扱いやがって。……てか、ここどこだ？」

「ここが、何でもお助け部の部室。になる部屋よ！」

(部室になる？ …… ってことはまだ部と認められてねえんじ
やねえか！)

俺は辺りを見渡す。

部室はざっと4・5人入ったとしても少し余るぐらいにやや広い
スペース。

真ん中には折りたたみ式の長方テーブルが一つ。左右にはパイプ
椅子が2つずつ置かれている。 誰かが使った痕跡はなく、まるで
新築と同様な部屋だ。

(よくもまあ、この無駄に広い学園でこんな良い部屋を見つけられたもんだ)

軽く説明しておく、この真上学園は生徒数が裕に2000人越えだ。

その為、敷地がとてつもなく広い。説明会で言ってたな……ええと、『某喋るねずみがいる遊園地を軽く超える広さ』だったかな。

広さは十分だけど、ほとんどの部屋は色んな部活で使われているからな。

「そういえば、部活認証には最低4人か5人はいないと厳しいんじゃないかったか？ いるのか？ 見たところ俺達2人しかないが……」

「アンタの目は節穴？ それとも腐ってるの？ ちゃんと見なさいよ」

こつこつして、悪口だけはひよいひよい出るのかね。たまには可愛い事を言ってみれば良いものを。……まあ、無理な要望か。

俺は更に部屋を見渡す。 あ、本当だ。いたよ。

部屋の隅っこで1人ポツンと桜色の和服を着た少女が、正座している。

その少女がまたましろと同じく、おかしな奴だと察した。……なぜなら、彼女の左側には刀らしきものがあるから。

知ってるか？ 自分の得物を右ではなく、左に置くって事は『私は貴方に敵意剥き出しですよ』って意味らしいぜ？ まあ、剣道の授業でたまたま耳に入った話だけだ。

(なぜに正座？ てか、あれは模造刀か？ これまたおかしいのが入ったもんだ。……まあ、オレもそこまで言えないか)

少しこの学園について補足すると、女子生徒の人数が一際多い。それだけに女子の制服改造は黙認されている。 さすが、元学園

園。

真上学園は『男卑女尊』って言葉がぴったりだな。困ったもんだ。

……じゃあ何で入ったかって？

それは単純に家から近いからと、体験入学で食べた学食が美味かったからだ。

あ、別に聞いてない？ これは失礼。

プロローグ3

「なあ、お前も俺と同じく、こいつに強制的に入れさせられたのか？」

俺は和服少女に向けて問いかけた。

「……………」

全く返事なし。精神統一中なのだろうか？ 目を瞑ったままピクリとも動かない。

「とりあえず、お互いに自己紹介したいんだけど……………」

返事を待たず、俺は和服少女へと近づく。

「あつ、だ、だめ！ 今近づいちゃ！」

不意に後ろからましろが止めに入る声があった。

だが、時既に遅し。

シュツッ！ ……………スパツッ。

「……………え？」

俺の前髪が綺麗に横一文字に切れ、ひらひらと落ちていく。振り向けば、ましろは俺を見ては慌てている。

何が起きたのか、俺には全然理解出来なかった。

カチンッ。

時代劇でもよく聞く、納刀する時に出る金属音。

（え？ なに俺、今……………斬られたのか？）

気づいた時には、俺の目の前にいた和服少女は立ち上がってこちらを見ていた。

「…瞑想の邪魔だ。斬るぞ？」

いや、もう斬ってたから。俺、バツサリもってかれたからね？

前髪が……………。

斬った本人は、ピカピカに磨き抜かれた翡翠のような切れ長の瞳で俺を睨みつける。

「それは悪かった。一応、自己紹介をしておきたくてさ」
「ならば、まずはお主から名乗れ。人に名を聞きたいのであればじやがな」

今時の女子高生って、老人みたいな喋り方も出来るのか。……いや、たぶんこいつだけなんだろうけど。

(初めて女の子にお主とか言われた。なにこの複雑な初体験)

「それもそうだな。俺は2年の桐咲悠里。お前は？」

「わしは藤原亜理紗。お主と同じ2年生じゃ」

納刀してある白い鞘を左手に持ちながら一礼する亜理紗。

いきなり斬りつけてくるもんだから、この礼儀正しさは逆に驚きが隠せない。

それに良く見ると、目の前にいるってだけというのにも関わらず、この気品溢れる佇まい。腰まで伸びた、艶がある漆黒の髪の毛がそれを更に引き立たせる。

2年の証である赤いリボンは髪を結わうのに使っているみたいだ。こいつを一言で表せと言われれば。大和撫子。とすぐに出るだろう。

「へえ。今の時代でも苗字に『の』が付く人っているんだな」

「理由はどうあれ、藤原の家系じゃからの。まあ、読み辛ければ『ふじわら』でも構わんし、下の名前でも良いぞ」

「そうか。……それじゃ、亜理紗と呼ぶ事にするよ。俺もどっちでも良いからな？」

「ではわしも、悠里。と下の名前で呼ばせてもらおうぞ」

「おう、よろしくな」

「うむ」

こいつとはまだ気が合いそうだな。

話がスムーズに済むし、なんと言ってもトゲトゲしくない。……どっかの誰かさんよりな。

「仲良くなったところ悪いんだけど」

俺と亜理紗の間にずいっと入り込むましろ。その顔はいつにも増

して不機嫌そうだ。

「お互い自己紹介終わったみたいだから、入部決定ね！ あ、あとアンタが部長ね」

ビシツとばかりに指を突き立てた。……その指先は俺。

「なっ！？ お前、勝手過ぎるだろ。何で俺が部長にならなくちゃいけないんだ」

「適任そうだから」

即答かよ。

あと、適任『そう』ってなんだよ。理由ははっきりとして欲しいところだ。

「そういえばそうじゃ。わしもこやつに強制に連れて来られたんじや」

さきほどした俺の質問への答えか。亜理紗は身構えながら言った。

（さすがの侍さんでも、ましろには勝てないか。……じゃなきゃ、ここにはいないもんな）

「人間が悪いわね。それでも優しく、丁寧に連れて来てあげたのよ？」

「何が優しく、丁寧じゃ。あんな……あんな、ぶ、物騒な物を出しておきながら！」

白い鞘をぎゅっと抱きしめながら震える亜理紗。

一体なにを出したって言うんだ？ ましろの奴。

「？ 砥石？」

言つが早く、右手に砥石を出すましろ。

「は？ 砥石？ 何でそんな物が物騒なんだよ」

「十分物騒じゃ！ そんな物で、他人がわしの……わしの愛刀を削るなどと。自分の衣服が剥がされているのと大差変わらんわ！」

更に強く抱きしめながら後退りする亜理紗。その目にはちよっぴりの涙が……。

（ 相当、刀を愛しているんだな、こいつ。まあ、なんだ。……弱点みっけ）

「そんな、荒くやるわけじゃないんだし。あと、砥がないと切れ味落ちちゃうんじゃない？」

「この刀は。　　？真理紗？（まりさ）はそんな簡単に切れ味など落ちません！」

意外と可愛らしい名前の刀だな。

そんなましろと亜理紗が話している中、俺はある疑問が浮かんだ。

プロローグ 4

「そういえば、結局部員はこれだけか？ 3人じゃないか。あと1人足りないぞ」

それを聞いた瞬間にましろはピクツと反応する。

（あ、こいつ。本当は足りてないのに、見栄を張ったな。……まったく）

勧誘するならするで構わないけど、もうちょっと計画性のある部活であってくれよ。こつ、部員数的意味でさ。

俺は肩をすくめながらため息を零した。

「しょうがないじゃない。他の子は来てくれないんだから」

まあ、こんな部とも決まってるような所には誰も来ないだろうな。……普通。

（じゃあ、なんだ。俺達なら少し変だから良いってか？ 変って事に否定はしないが、それはちよつと複雑だぞ）

「ま、まあ、この人数でも良いかどうか聞いてみるわよ。ほら、職員室行くわよ！」

言い終える前にましろはドアを開けて、部屋の外へ。まったく、行動の早さだけは一人前だ。

てか、俺は職員室行くのにさほど抵抗があるってのに。……しょうがないな。

もう一度ため息を吐きながら、俺が部屋を出ようとしたところで、亜理紗に袖を引っ張られた。

「あやつは、毎度あんな感じなのか？」

あやつ？ …… ああ、ましろの事か。

（うーん、これはあまり他言する事じゃないけど。この場にあいつはいないし、こいつになら……少しは大丈夫か）

「？こついう所？では、いつはああなつちまうんだよ。……まあ、

なんだ。ワケあり事情ってところだな。 お前もそんなもんだろ？ だから、あまり悪く思わないでやってくれ」

俺の後半部分の発言で反応したんだろう。

袖を掴む手を離して、その場から一步後ろに下がる亜理紗。

「俺は何も気にしないさ」

「目付きが悪くて、怖い顔をしているが。信用してよいのか？」

「ああ。それはちゃんと保証してやる。……ちなみに、この顔は元からだ」

こつこつ顔にしとかないと、色々面倒事を頼まれそうだからな。

「……ふう」

ため息とは違う、安堵の息を洩らす亜理紗。

「完全にではないんじやが、悠里。お主を一応信用しておこうかの微笑みながら俺を通り過ぎ、ドアを開けて出る。

まあ、言ってみるもんだな。

俺も続くように出て、ましろを追った。

俺達は職員室前に着き、少し休憩中。

本当にこの学園は広すぎる。職員室に向かうだけで、十分台もかかるなんて……前代未聞だよな。疲れるったらありゃしない。

「来たまでは良いけどよ。……顧問になってもらう先生は、誰にするんだ？」

「華月先生よ」

ええー、よりもよってあの先生にかよ。俺はあの人、少し苦手なんだよな。

俺は、自分でもわかるぐらいに嫌な顔をした。

それでもましろは無視をこいて、そのまま中へ。

「失礼します」

「失礼するぞ」

「……」

ちなみに華月先生の席は入ってすぐ右手に見える。

ましろがすぐに先生へと向かっていく、俺達もそれに続く。

「華月先生。ちよつと頼みたい事がありました」

「なにかな、神崎さ……っ!？」

先生は俺の顔を見た瞬間、怖い物にでも出会ったかのようにビクツと肩をあげた。

「あわわわ、な、なにかな!？」

体とサイズが合わない崩れた服をせつせと直しつつ。

更に慌てるようにして、両手を両膝に乗せて、背筋をピンと伸ばす。

俺がいつも怖い顔してるせいなのか。この人は俺を見る度にびくびくするんだよな。

これが、俺が行きたくない理由の一つでもある。

(そこまでびびられると、俺が全部悪いみたいじゃないか。何もやってねえのに)

俺はましろに「後は頼む」と耳打ちして、二歩ほど先生から離れる。

「先生に頼みというのは、新規部活を申請する為に顧問をやって欲しいという事なんですけど」

俺が離れてから、深呼吸を一度して冷静を取り戻す華月先生。

「私で良ければ構わないけど。……でも見るかぎり3人、なのかな? それだとちよつと駄目かな」

「それは……」

ましろが黙り込んでいる、そこへ。

「私が入ろうかあ?」

不意に後ろから聞こえた声に振り向く。

そこには真上学園の制服　サイズが全然合っていない　を着ている、ましろより一回り小さい女子がいた。

頭のとっぺんにくせ毛がちゃんとあるのが目立つ、すみれ色の短

髪。とろんと垂れた瞳の中は、琥珀が光っているみたいだ。

胸元のリボンは青。……てことはこの人、3年生なのか!?

「え、良いの？ 遙……じゃなくて、華月さん」

「うん、良いよお。ちょっと興味があるしね」

今、呼び捨てしたよな、先生。 苗字を聞くかぎり姉妹かの2人。似てるのは髪の毛だけか。

ましろは少し思案顔をして、黙ったまま。

考える必要はないだろ。これは、願ってもないチャンスじゃないか。

プロローグ5

「ああ、こつちとしても有り難いな。 良いだろ？ 2人とも」

俺は2人の方を向き、返答を伺う。

「わしは構わんぞ」

「……うん」

ましろの奴、やけに不満気だな。せつかく揃ったんだから喜べばいいのに。

「ま、そういう事で、よろしく頼みます。華月先輩」

「うん、よろしくね」

ゆっくりとした口調で、垂れてる袖をぶんぶんと振る仕草は、…何というか、癒されるな、うん。

こんなお子様体型で3年生っていうのも中々……いや、なんでもない。

「それじゃ、お互い了承って事で。 じゃあ、部室についてだけ

ど」

「あ、それでしたら」

ましろが部室………というよりも、勝手に使ってた部屋についてを先生に説明していた。

「はい、わかりました。じゃあ、私は部活申請書と許可を取りに行きますので、皆は部室で待っててね」

そう言つと、華月先生はそそくさと部活関連を担当している先生の所へ向かっていった。

意外とすんなり済んで何よりってところだな。

くどいだらうけど、この学園は広い。

俺達は、また十分ほど掛けて部室に戻ってる最中だ。

「そういえば、華月先輩は華月先生と姉妹なんですか？」

「うん、そうだよ。それと、私のことは遥で良いよ。まどろっこしいでしょ？」

桐咲悠里、君

「まあ、そうですね」

ん？ 俺ってこの人とは初対面だよな？

（実はどっかで会ってるのか？ いやそうだとしたらたぶん覚えてるだろうな）

そうこう考えてる間に、部室へと着いた。ああ疲れたな。

ましろと亜理紗は入るなり、椅子に座る。俺も座るとしよう。

あ、そういえば、部員数が足りたんだっけか。

「じゃあ、部員も足りたことだし、今お互いに自己紹介でも」

「必要ないよ」。……刀を持っている君が藤原亜理紗ちゃん、私の事をまだ認めてない感じに睨んでいる君が神崎ましろちゃん。でしよ〜？」

バツチリ正解だ。

まあ、それよりも。

「どついう事だ？ ましろ」

「どうもこうも、そのままの意味よ。だって、タイミングが良すぎるじゃない。何か狙いでもあるんじゃないかって疑ってるの」

疑いの眼差しをすんとも変えなましろ。

「確かにタイミングにしては良すぎるけど、でも結果的には部が結成出来たんだから気にする事でもないだろ」

「アンタが気にしなくても、私が気にするの！」

どついうこつたい。

というか、俺部長だよな？ 部長の意見もなしときますか。

「それじゃ、テストするわよ」

不意に言い放つましろ。本当に突然だな。

「いいよ〜」

微笑みながら応える遥先輩。あ、そこ乗るのか。

「課題は簡単。私を何でも良いから満足させてみなさい。出来たら認めるわ」

確かに至極単純だが、それは結構ハードル高いぞ。

（しょうがない、狙うと危険な弱点でも教えよう。あれなら一発KOだ）

「遥先輩」

「うん、大丈夫だよ。じゃあ、隣の部屋来て来て」

教えようと思ったら、袖をひらひらさせながら手招きし、ましろと一緒に隣の部屋（たぶん今の時間だと誰もいない）へと行ってしまった。

俺と亜理紗は呆然と見送った。

俺達はゆっくり茶でも飲んで待つ事数分。

ガチャ！

突然ドアが開き入って来たのは、ましろ。

だが、様子がおかしい。体をふるふる震わせながら千鳥足で俺の近くに寄るなり、倒れた。

「お、おい、どうした？」

抱き起こしながら問うと、少しの風音でも消えてしまいそうなほどに細く、甘い声が聞こえた。

「……も、もう、らめ。……お、お嫁にいけ……ない」

今度は全身をピクピクと痙攣けいれんさせながら俺にもたれる。微かに体が熱を出してる。

（この感じは弱点をやられた時と似てる。でも、ここまでは……）
「なはは、やり過ぎちゃったかな？」

頭をぽりぽりしながら戻って来た遥先輩。

「ちよつ、これ、先輩一体何したんですか！？」

「え〜？ 何って、ただ？足の裏？をマッサージしただけだよ〜」

そう、ましろの弱点は足の裏だ。一度そこをやられると、何故か体が火照り、数十分間は動けなくらしい。

補足すると、家族全員そうなるらしい。まあ、遺伝って事だな。

……変わった体質だよな。まあ、俺もそこまで言えないんだけども。そういえば前に一度、俺がちょっと触っただけで、腰抜かしたからなこいつ。

……いやしかし、ここまでにするとは恐るべしだな。

「じゃあ、ましろがこうなったから遥先輩の勝ちで、認めるって事で良いよな。もう」

「……な、なに勝手に決め……はっ」

反应的に俺へと抱き付いて来るましろ。

いやしかし、今の状況どうしたものか。

抱き付かれてて、甘い声洩らすわ、なおかつ涙目の上目遣いで見るし、更に体は火照ってると来た。

(ドキドキすんなって言われても、無理だろ！)

ガチャ！

「皆、お待たせ。ちゃんと部活動としての許可を貰ってきた。」「
タイミングバッチリだ先生。どうかこの状況を
バタン！」

何で、閉めるの!？

それに心なしか顔が引きつってたのが見えたぞ。絶対に勘違いしてるよ、あの先生!

「では、わしもそろそろ御暇おいとましようかの」

「明日からよろしくね、2人とも。ごゆっくり」

2人は微笑か苦笑かわからない顔でそそくさと俺達を置いて帰って行きやがった。

(ええ!? そ、そんな!)

という感じで、『何でもお助け部』は結成され、俺の平穏な生活は壊された。

とにかく、誰か……助けてくれ。

プロローグ E N D

この冷たさをなんとかしてくれっ

今更なただけどさ。

あの日、なんだかんで部員が揃い、すんなりと部活が結成出来た。そこまでは良いよな？

でも、結局のところ、この部活は具体的に何をやるのだろうか。部についての発案者本人のましろとは違うクラスだ。

一応聞きには行ってるんだけどさ。……運悪く、その聞きに向かった時のタイミングがひどい。

(活動目的も知らない部長なんて、どこの学園にいるよ。……ここにいます、ってか)

「……はあ、どうしたもんかなあ」
ため息を零すも、足はちゃんと部室へ向かっていた。

俺達 『何でもお助け部』が拠点とする部屋。教室からなら、数分で行ける距離だ。

部室へと着いた俺はドアを開けて、中へと入る。

「まだ誰も来てないのか……」

俺は部屋の奥の窓際へ向かい。新しく追加された、面積の広い机(部長専用らしい)に座る。

ここからだと部屋全体が軽く見渡せる。

新築みたいに綺麗な部屋。備品もテーブルと椅子だけで何も無い。少しだけ物寂しさを感じてしまう。

「……」
(なにこれ、とてつもなく暇だ)

俺は自分の鞆を開けて、暇潰しが出来そうな物を探す。あ、
そつえば良い物があるじゃないか。

『あまりにも燃えない展開』で有名な、少年向けコミック誌。『月刊少年ウェンズデイ』……ちなみに俺の愛読書である。

丁度良く今は誰もいないし、ゆっくりとこの平穏なひと時を過ごすか。

俺は頬杖をつきながらページを開いた。

ガチャ！

「すまんの、遅くなってしまった」

「いやー、疲れたね」

「……」

亜理紗、遥先輩、ましろという順番で部室に入ってきた。

3人とも制服ではなく、白のハーフシャツに藍色のハーフパンツを着ている。 体育の授業時の姿だ。

ていうか、俺の平穏なひと時が10秒も経たずに崩壊したな。

「2人は、まあわかるけど。……遥先輩のクラスも体育だったんですか？」

「そうだよー。今日はましろちゃん達のクラスと合同授業だったんだよ」

それなら納得だ。

それにしても、ましろは俺の顔を見る度に不機嫌になる。まあ、不機嫌な理由は俺が一番よく知っている。……あれは不可抗力だって謝ったじゃないか。

「アンタ、今でもそんなの読んでるのね」

「ああ、俺にはこのぐらいの本が丁度良いんだよ」

「そう。……なら、しっかりと集中して読んでなさいよ？ 読み終わるまで絶対に本以外を見ない事。良いわね？」

「お、おう？」

意味があまり理解出来なかった。

だけど、『絶対に』の強調で聞き返すのをやめて、俺はページを再度開いた。

読む事1分弱。

部屋の中が静か過ぎて、ページを開く時に出る、紙と指がすれて出る音が異様に大きく感じる。

それに、ファサツと衣類などを落とす時、微かにも聴こえる音が一緒に耳へと入った。　ファサツ？

俺は顔を上げそうになって止める。ましてに言われた事を思い出したからだ。

とりあえず、やや上がりかけた視線を本に戻し、読み進めた。

俺は、この少年誌に掲載されているある漫画のページを、ワケあつて見ないようにといつも警戒していた。

だが、今回はそれを疎かにしていた事にも気が付かず……開いてしまった。

その漫画とは、少年誌だつていうのにちょっと過激なシーンが多々ある漫画。

しかも、運悪く開いたページがまさにそういうシーンだった。

「ぶっ！ あつぶねっ！」

吹き出すと同時に立ち上がり、反射的にその少年誌を前方へと投げた。今まで視界を狭めていた物が無くなり、視界がとても広くなった。

「……へ？」

眼前に映るもの、それが一瞬だけ理解するのが遅れた。　いや、これは理解しない方が良かったのかもしれない。

目の前の少女達は、皆下着姿で、いざ制服の袖を通そうとしている最中。……そう、着替え中であつた。

まだ、下（スカートや袴）を穿いているだけ不幸中の幸いか。

でも、オレにとってはそれだけで？十分過ぎる？ほどに危険だ。体型は小さめだけど、一応1人の女性というわけだからな。

まあ、ましては昔に見慣れているから問題はない。

……その、なんだ。残りの2人が、な。服でわからなかったけど、意外と良い形の膨らみがあるんだよ。

ドクンツドクンツ。

漫画と今の刺激のせいで、心拍が異常なまでに速くなる。体の底からジワツと熱くなる。

(熱くなるな、収まってくれ！)

俺は胸を押さえたまま、なかなか視線が逸らせずその場で硬直。ましろ達も動かずにいた。

この冷たさをなんとかかしてくれっ 2

一瞬にしては長く感じるこの沈黙。
見ると、ましろはふるふると身震いをしている。

「……な、な、なな……！」

顔が怖い。これは明らかに怒っているに違いない。

「……な、なに見てるのよ！ い、一度ならず、？二度？までも！
ソプラノの中でも微妙に低いトーンの怒鳴り声で、沈黙は破られ、
はっと我に帰る。

負けじとこちらも反論。

「あら、見られたくないのなら、なんでここで着替えたのかしらね
？」

と柔らかなソプラノの声が部屋中に広がった。……なんだって？

「……え？」

「む？」

「あれ？」

「！？」

不覚だった。まさか、もう切り替わりそうだななんて。

耳慣れない口調と声に、皆は首を傾げていた。

(まずい。これはまずいって！)

よりにもよって、ましろの前で？あの人？が出掛けている。

幸いにもまだ完全じゃない。まだ間に合う。

「げっ！ 先生！？」

俺は大声をあげながら、皆の後ろを指さす。

皆は合わせて後ろを振り向くが、そこには誰もいない。

それもそのはず、ただのデマなんだからな。よし、今がチャ
ンス。
バリーン！

唯一の逃げ道の窓を割り、俺は部屋から脱出。「あー！ 逃げた！？」と窓からましろの声が聞こえた。

ちなみに部室があるのは2階。

高さはあるけど、ちゃんと受身さえ取れば大丈夫なはず
グキッ。

「いってー！」

受身失敗。冷静を保っていたらこんなはずはない。

今ので右足を思い切り捻った。これは痛い。

それでも俺は、捻った右足を引きずりながら裏庭へと向かった。

しかしまあ、人ってすごいよな。どんなに痛くても、とりあえずは動ける。必死だったらの話だけだな。

部室から裏庭は結構な距離がある。ここまで来れば、見つかりはしないだろう。

裏庭は生徒会長のおかげで、多種類の木や花などが植えられている。

とりあえず自然が溢れていると言おう。現代のコンクリートなんてもんは皆無。全部自然。地面なんて、一面が芝生だぜ？

初めて訪れた人が、「別世界に迷いこんでしまったのか？」と世迷言を言っても仕方がないぐらいに。

補足すると学園でも人気の高い、癒しのスポットだ。俺も気分を落ち着かせたい時には毎度お世話になっている。

まあ、放課後だから、今は周りに誰もいない。独占だな。

「……ふう。まずは、こいつを落ち着かせん？」

俺は1本の大木の前で休もうとして、ふと目に入った。

目の前にそびえ立つ、緑が豊かに生い茂った大木……の枝に人が乗っている。

木の葉によつてあまり見えないが、確かにいる。

今にも落ちそうだな。……制服からして、あれは女子か。

「おいおい、何やってんだそんなところで？」

「え？ ……きゃっ！」

声を掛けたせいか。その女子は俺に気づくと同時に足を枝から外し、そのまま落下。

「うおお！」

俺は両手を大きく広げて、上手くキャッチしようとしてぶにっ。

俺の頭が女子の尻をへと……。ナイスヘディング。じゃなくて。

「や、やわらか……」

さっきの刺激といい、このとても柔らかくて甘い香りがするもののせいで、落ち着かせるつもりがまた慌てだした。

バタン。

少女は芝生に倒れた。俺との接触により、少しは衝撃が和らいでいるだろう。

……それにしても、落ちてきた尻　もとい、人に頭をぶつけたんだ。

脳震盪を起こすほどの振動が襲い掛かるわけで。……俺もその場で気絶した。

ドクンツドクンツ。

高鳴る鼓動をそのままに。

「……ん」

少女は燦々たる木漏れ日により、目を細めながらも半身を起こす。今の状況が理解出来ない様子だ。

自分が何のために木へ登っていたのかまでは覚えていても、何故寝ていたのかはわからない。

「わたし、なんで眠って……！？」

不意に少女は、綺麗な緑玉の瞳に映ったものに驚きを隠せなかった。何故か。

それは真上学園の男子生徒服を着た 見た事のない絶世の美少女が寝ていたからである。

波を打つようにゆるやかなブロンドの髪。

学生とは思えない、大人の色気をたたえたその美貌に、言葉を失う。

少女は……ただ、その？彼女？に見惚れていた。

「うん……」

「っ！」

彼女が不意に出した唸り声で、少女は我に返った。

さっきまで見惚れていた少女。

倒れている人がいた場合、どう対処するかという基礎的行為を忘れていた。

それを今更になって気づいた恥ずかしさ。目の前にいる者により与えられた緊張によって、胸の高鳴りが収まらない　　が、意を決することに。

「……大丈夫ですか？」

なるべく揺らさないように、声をかけながら彼女の肩を2・3回叩く。

さきほど、彼女は微弱ながらも声を発していた。

ということは、ちゃんと呼吸はしている。あとは意識が戻ればなんとかなる……。

だが、叩いても反応がない。

悪化でもしてしまったのかと、少し近づいて確かめてみようと思ってみた。その時。

「えへへ、ましろちゃ〜ん」

「ええ!？」

ガシツ！ とばかりに突然と抱き付いてきた彼女に、思わず大声をあげて驚く少女。

明らか自分ではない名前を聞いた少女は、知り合いと間違えたのだと思

「も、申し訳ないですけど。わたしはましろという方ではないですよ。……でも、良かった。意識が戻ったみたいで」

と弁解もしつつ背中をさする。

すると彼女は、澄んだ碧眼をぱちくりと瞬かせる。

そして、少女の顔を凝視した。

「……あら、本当。ごめんなさいね、勘違いしちゃったわ」

少女を放し、微笑む彼女。すつと吹いたそよ風が、彼女の髪を揺らす。

ゆるやかになびく金色の髪。それを掻き分ける仕草でさえも、美しい。

少女はその光景を見て、またしてもドキツとしてしまった。

「い、いえっ、気にしないで下さい」

「ふふっ、ありがとう」

「あの、つかぬ事をお聞きしますが、なぜこんな所で寝ていたのですか？」

「うーん、そうね……。……右足を捻ってたからじゃないかしら？」

「……？ え、ええと、とりあえず足を怪我しているんですね。それじゃ、保健室へ」

「あら、いいわよそんなの。それよりも……貴方は、『何でもお助け部』へ入部届けを出しに行く途中だったんじゃないかしら？ 早めに向かった方が良いわよ？」

「えっ、な、なぜそれを……？」

少女は驚きの表情を浮かべる。

彼女は少女に微笑み返すと、後ろに立つ大木を見上げた。

「お姉さんには全部お見通しって事よ。……それに、？あの子のことは任せなさい。だから、ね？」

「は、はい。わかりました。……それでは」

少女は渋々立ち上がると、そのまま校舎へ走っていった。

見送った彼女は、左手に隠してあった紙を取り出す。

それは、さきほど少女に抱きついた時、ポケットから盗った『何でもお助け部ご案内』と書かれた広告紙である。

内容は、『部活目的はとりあえず助ける！ 入部してくれた人に

はもれなく、この可愛いキーホルダーが付いてきます！』とだけ。
ちなみにそのキーホルダーとは、目が点の黒い猫(?)を象った
ものだ。……これは可愛いと言えるのか？

「ふふつ、それにしても、悠君も隅におけないわねー。ごめん
ごめん。……わかってるわよ。あの子の前には出てきちゃダメ、
でしょ？」

微笑みながら、木の葉達を見上げる形で芝生に寝転がる。

「別にお姉さんは構わないけど、貴方がねー。……そう？ なら、
せいぜい興奮しないよう頑張るなさいな。それと、あそこにい
る？子猫？ちゃんの事も頼んだわ。それじゃ、おやすみ、悠君」

そして 彼女はゆっくりと、瞳を閉じた。

葉っぱの隙間を縫うように、チラチラと陽射しが眩しい。

(そろそろ戻らないとうるさくなりそうだな)

俺は起き上がると、自分の後ろにある木を見上げる。

良い環境内で育てられてるおかげか、これは余裕で5メートルぐ
らいはあるんじゃないか？

「結構高いんだなっ」と

一番近い枝に目掛けてジャンプして掴む。

そして、そのまま逆上がりして、更に上の枝へと飛び移る。

これを繰り返し、難なく目的の所まで登り着いたな。

さて、お困りの子猫ちゃんはどこだ……。

にゃあ、にゃあ。

お、いたいた。

毛並みが揃っている白い猫が枝にしがみ付いたまま動こうとして
いない。

まあ、おそらく登ったままでは良いけど、下りられなくなっただって
いう。……例のお決まりだな。

(あいつは、この子を助ける為に登ってたんだな……)

「さあ、おいで
にゃあん……。」

声には反応してるが、ピクリとも動いてくれないからしょうがない。

「何もしねえから、大人しくな。よし……そのまま暴れるなよつと
俺はそつと近付き、猫を両手で持ち上げて、木から飛び降りる。

今度は無事に着地成功だ。

この冷たさをなんとかしてくれっ 4

「さて、と。ほら、もう大丈夫だぞ」

俺はその場にしゃがみ、全身が白い猫を芝生に放そうとする。

「やあん。」

……

……あれ？ 一向に俺の手から動こうとしないぞ、こいつ。

まさか、猫なのに極度の高所恐怖症か？ いや、そんなはずはないだろ。

「そんなに高くないだろ？ ほら」

更に手の位置を芝生に近づけるのだが。

そいつは、にやあと鳴きはするものの動かない。

もしかして。……また懐かれたのか？ 俺。

(何で、動物だけはやけに俺に懐くのかね……)

ふと過去を思い出すと、色んな映像が頭に流れてくる。

昔はある奴に無理矢理動物園の トラがいる檻 の中へ入れられ、襲われるかと思ったら何だかんだでトラは懐き始め。飼育委員さんが目玉飛び出しそうな、驚愕な顔をしてたのを覚えてる。

ゴミを荒らしてるカラスを追い払おうとしたら、今度は俺に群がり始め、家にまで付いて来る始末だ。

おかげで一時期変な通り名が付いたんだからな。それは思い出したくもない。

他にも色々あった。ありすぎて、この状況がすぐにそういう事なんだと理解した。

「はあ……わかったよ。よし、こっち来い」

俺は右手で左肩の方へと促す。

すると、白猫はすんなりと左肩まで来てくれた。

ここまで懐いてるとなると、どこかに置いて行くのも薄情ってや

つだよな。

てか、近くで見るとこいつ。毛並みは揃ってるし、宝石のルビーみたいに綺麗な紅い眼をしてるな。実は良い所の飼猫か？

しかし、首輪もそれに代わる物も何もない。真っ白。やっぱりこいつも野良猫、か。

「……苦労してるんだな。お前も」

俺はそう言つて、微笑む。

つて、俺は動物相手に何話しかけてるんだか。

どっからどう見ても痛いぞ、これは。

それに、こんな所で迂闊に表情を緩くして、他の奴に見られてもしたら何を思われるか。

とりあえず、周りを見渡す。誰もいない、良かった。

それじゃ、さっさと部室に戻るとするか。

そろそろ下校時間にもなるし、それに 新入部員の歓迎もしないとな。

部室前に着いたは良いのだが……とても入り難い。だって、さっきまで……な？

ドアの奥を凝視する俺の頭に、ぼんやりとだがしつかりと、さきほどまで見ていた彼女らの下着姿が浮かぶ。

(くそっ！ 思い出すな。消える消える！)

俺はかき消す様に頭を大きく振る。せつかく落ち着かせたというのに、また熱くなられては困る。

こちらの不可抗力とあちらの不関心が生んだ事故とはいえ、その、着替えを見ちまったわけだ。

悪いな、亜理紗と遙先輩。……と、一応ましろ。

とりあえず心の中で謝罪をする。

しかし、あのましろがあそこまで怒った事には少々驚いた。いや、大抵の女性なら普通に激怒モノだとは思っけどな。

だが、俺の知ってるあいつは違う。

(あいつ、昔はあんなに堂々と……)

と思いつくがすぐにそれを消す。今と昔は違う。

思考を切り替える、俺。今は違うんだ。

俺はその場で深呼吸を始める。

てか、何で部室に入る為にどれだけ時間を掛けているんだ？ 俺。

よしと気合を入れ、ドアノブに手をかけた。その時

「あーはっはっはっは！ 何よそれ、面白っ！ あはははっ、あはっ、けほっごほっ！」

と、トーン高めの大声で笑い上げる……ましろか？

何笑ってんだ？ ていうか最後の方むせてるぞ、大丈夫か？

俺は何事かとドアを大きく開ける。

そこには、腹を抑えながら笑いを堪えているましろ。その左右に亜理紗と遥先輩。

……そして、その今にも笑い死にそうなましろの前方には華奢な女子生徒が1人。

大笑い中のましろをジッと凝視している。

「あははっ、あーアンタ丁度良いところにあははっ、この子新しくふふっ、入部するらふっふっ、あはっ、げほっ」

「わかった、わかったから。まずは落ち着け。所々意味不明になっ
てっから」

「うん……ふふっ」

こいつの今の状態じゃ駄目だ。話がロクにできん。

「 亜理紗。状況の説明、お願いできるか？」

「うむ。そこにおる娘が、こやつが言ってた通り新入部員じゃ。それでまた突然テストを始めた 『とりあえず私を笑わせてみなさい』とな。そして、この結果じゃ」

ましろの方を見た亜理紗は「わしは何が面白かったのか全然わからなかったがの」と呆れた様に漆黒の髪を揺らす。

状況は何となく察した。またこいつは所構わずテストを出して…

∴結局負けたのか。お前、こついつの勝った試しがないな、本当。
まあなんにしても、入部決定で良いよな？

「 というわけだ。テストは合格。入部おめでとさん」
俺は女子生徒に近付いて、小さな肩にぼんと手を置いた。
その瞬間だ。

「っ!?!?」

バツ!

一瞬だった。

少女は目にも止まらぬ速さで俺の手を弾き、飛び退いた。

「え?」

俺は皆の顔を窺う。亜理紗と遙先輩も突然の事に驚いた表情。ましろは……笑っている。

っていつまで笑ってるんだお前は。まあいい、ほっとこう。

「……お、男の、人」

今まさに俺の 男の存在を知ったかの様にたじろぎ、エメラルドみたいな瞳で俺を凝視する。その目は少々泳いでいた。
いきなり触ったから驚いているのか? それとも……。

(これまたややこしくなりそうな予感がする)

俺はため息を吐くなり、頭を掻いた。

俺と微妙な距離を空けている少女は、青空のように澄んでい
る水色のシヨート。華奢な体つき……とはいっても、ましろより出
る所は出ている。

若干だが、背も高い。

全体的に言くと、ましろ以上亜理紗未満、ってところか。

「驚かせて悪かった。俺はこの『何でもお助け部』の部長をやらさ
れている、桐咲悠里だ」

「この人が部長……。わたしはてっきり……」

「ん? なんだって?」

「い、いえ、何でもありません。わたしは、1年の夜桜梨多たです。よろしく願います」

ペコリとお辞儀をする少女。梨多は ましろと同じく無改造の制服に胸元には緑のリボン。これといって変なところは一切ない。正直最初の反応には驚いたが、この中でもマシな子だろう。

と、俺は安堵のようなため息を零す。

頭を上げた梨多は、また俺を……細かく言えば俺の左肩辺りを凝視していた。

どうやら、こいつに気が付いたらしい。

「その猫……」

「ああ、こいつか？ 木から降りれなさそうにしてたから降ろしてやったんだ。そしたら懐かれちゃってな」

説明してやると、今度は俺の顔を見やる。気のせいか視線が冷たく感じるぞ。

あれだ。俺みたいな奴には普通懐きはしないだろとか思ってるんだろうな。 前に言われたことあるし。

(どうせ、誰も近寄りたがらない顔してますよ)

俺は肩をすくめてみせた。

「……いえ、その子。とても先輩に懐いているようですよ。懐く……というよりも、これは好意を持つてる？」

俺は肩に乗っている白猫を見る。

懐く以上、好意を持っている？ 俺にはただ普通に制服にしがみ付いてるようにしか見えないんだけどな。

ていうか待て。俺、思ったことを口に出したか？ ……まあいいか。

「よくわかるな。そんなこと」

「先輩の肩にじつと動かないでいるから、もしかしたらという推測です。あと……動物には少々詳しいので」

へえ、と頷くなり俺は亜理紗達にも白猫を見せる。

女子は皆、小動物 可愛いものに目がないってのは本当だな。

遥先輩はいつもふわつとした顔がニツコリと笑う、気に入ったって感じた。

「触っても、いいのかな?」

亜理紗は翡翠の瞳を若干ながら輝かせている。「いいと思うぞ」と俺は白猫を近付かせた。

「だけど、そいつは亜理紗の手が触れそうになった瞬間、俊敏な動きで俺の頭へとよじ登る。」

「てか、いてててっ!? こいつ、爪立てた状態で登りやがったな。まだ成長しきれてない爪だから良いけど、爪は立てるなお願い。」

「……………」

猫に避けられた亜理紗は寂しそうな顔をして呻く。…………おい、そんな上目使いされても俺は困る。そんな猫好きだったのか、お前。まったく、どっちが小動物なんだかな。

「もしかするなら、ただシャイなだけって事もあるし。あとは考えたくねえが、親的存在だと思われてるのかもな」

「無きにしも非ず。ですね。それより、気になることが……………」

梨多は真っ直ぐに俺を見る。その目はさきほどの冷たい目とは少々違うが、怪しんでるのは変わらない。

「なんだなんだ? 俺、何か悪い事したか?」

「その子、どこの木にいたんですか?」

「ああ、?裏庭?の真ん中に立ってたとこの……………」

「…………あ、しまった!」

俺は自分の失態に後悔した。

「それじゃあ、女の人がいまませんでしたか? 丁度、先輩と同じ制服を着ていた人なんですが」

「(やっぱりそれ聞かー)」

俺は心の中で頭を抱えた。予想通りの質問だ。とてつもなく答え辛い、というか答えられねえ。

「しょうがない、何とか誤魔化すでしょう。」

正直、嘘を吐くなんて事したくないけど。この場合は本当しよ

うがない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5543y/>

たすけてっ！

2011年11月16日03時17分発行